

(4 月 29 日)「詩編 51 : 1~8」

あなたに、あなたのみにわたしは罪を犯し 御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく あなたの裁きに誤りはありません。

(詩編 51 編 6 節)

・「憐れみの嘆願」：救いを求める個人の祈りです。聖書にはたくさんの人物が登場しますが、完全な人間はイエス様以外、一人も出てきません。イスラエルの偉大な王、ダビデもその一人です。サムエル記下 11 章には目を覆いたくなるような物語が書かれます。

・ダビデは部下のウリヤの妻バト・シェバと不倫関係になります。そして彼女が身ごもったのを知ると、夫ウリヤを戦いの最前線に送り、戦死させてしまいます。つまり姦淫と殺人という二つの罪を犯したのです。

・ダビデは預言者ナタンに叱責されます(サム下 12 章)。そこで自分の罪に気づかされたダビデは、こう言うのです。「わたしは主に罪を犯した」と。3 節から 5 節には、その罪を悔い、祈る言葉が並びます。「罪の告白」が並ぶのです。

(4 月 30 日)「詩編 51 : 9~14」

ヒソプの枝でわたしの罪を払ってください わたしが清くなるように。わたしを洗ってください 雪よりも白くなるように。

(詩編 51 編 9 節)

・9 節にある「ヒソプ」は旧約聖書に出てくる植物で、清めの儀式の際に用いられてきました。建物の竣工式などの礼拝では、ヒソプで水を振りまきながら詩編 51 編を唱えるという儀式をすることがあります。

・聖歌 513 番「主よわが身をとらえたまえ」の 4 節は、このような歌詞になっています。「わがすべては 主のものなり 主はわが喜び また幸なり きよき霊を 満たしたまえ さらばとこしえの 安きを受けん」。

・この 4 節の歌詞は、詩編 51 編 12 節と響き合います。わたしたちが罪の告白をすることができるのは、神さまが憐れみ深い方だと信じているからです。その憐れみによってのみ生かされる、そのことを覚えていきましょう。

詩 編 通 読

4 月



(4月 1日)「詩編 38 : 10~17」

主よ、わたしはなお、あなたを待ち望みます。わたしの主よ、わたしの神よ
御自身でわたしに答えてください。

(詩編 38 編 16 節)

・作者は12編で、「疫病にかかったわたしを 愛する者も友も避けて立ち わたしに近い者も、遠く離れて立ちます」と書きます。いやいや、病気になったらたくさんの方がお見舞いに来ますよ、と思うかもしれませんが。

・2020年から世界中に蔓延した新型コロナウイルスは、わたしたちの日常を変えていきました。その病気にかかると、“濃厚接触者”までが「隔離」されたといったわけです。当時の病気に対する考え方と、それほど変わらないのかもしれませんが。

・その孤独の中で、一切言葉を返すことのできない状況にありながら、「主よ、わたしはなお、あなたを待ち望みます」と祈るのです。生きる力が絶えそうになっても、祈る力だけはわたしたちに残されているのです。

(4月 2日)「詩編 38 : 18~23」

主よ、わたしを見捨てないでください。わたしの神よ、遠く離れないでください。

(詩編 38 編 22 節)

・わたしたちは聖餐式の中で、懺悔をおこないます。「わたしは、思いと、言葉と、行いによって、多くの罪を犯していることを懺悔します。神よ、どうかわたしを憐れみ赦してください」。

・しかしもし、毎週の懺悔の中でその罪惡の項目をすべて言い表さなければならなかったら、どんなことになるでしょうか。聖公会の礼拝では、懺悔はまず司祭からおこないますが、その懺悔の言葉だけでかなりの時間を取らなければならなくなってしまうでしょう。

・神さまのお怒りは正当なものなのだと思います。わたしたち罪深い者にとって、その罪の赦しがなかったとしたら、わたしたちは神さまから遠く離れてしまうしかないのです。わたしたちは、神さまの救いに頼るしかないということです。

(4月 27日)「詩編 50 : 7~15」

それから、わたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう。そのことによって お前はわたしの栄光を輝かすであろう。」

(詩編 50 編 15 節)

・昨日の箇所が続いて、告発が続いていきます。旧約聖書にはさまざまな「献げ物」に関する決まりがありました。このようなときには雄牛を、この罪を犯したら雄山羊を、といった具合にです。

・ただそれらの「いけにえ」は、そもそも神さまの所有物です。神さまからいただいた（預かった）ものを「お献げします！」というのは少し違うのではないかと神さまは指摘されるのです。

・そうではなく、「告白を神へのいけにえとささげ」なさいと促されるのです。心からの懺悔をし、自分自身を献げること、それが神さまが求めておられることであり、本当の礼拝なのです。

(4月 28日)「詩編 50 : 16~23」

告白をいけにえとしてささげる人は わたしを栄光に輝かすであろう。道を正す人に わたしは神の救いを示そう。」

(詩編 50 編 23 節)

・わたしたちは神さまの前に、「善い人」を演じようとしています。「敬虔なクリスチャン」でありたいと願います。それはとても大事なことです。しかし神さまは、わたしたちの心の内面をよく知っておられます。

・「盗人と見ればこれにくみし 姦淫を行う者の仲間になる。悪事は口に親しみ 欺きが舌を御している。座しては兄弟をそしり 同じ母の子を中傷する」。18~20 節に、罪が列挙されています。

・「わたしはそこまでひどくありません」と否定するのか、「思いと言葉と行いによって確かに罪を犯していました」と告白するのか。神さまは「告白」をいけにえとしてささげる人を求めておられます。

(4月 25日)「詩編 49 : 14~21」

しかし、神はわたしの魂を贖い 陰府の手から取り上げてくださる。

(詩編 49 編 16 節)

・わたしたちが神さまの元に帰るとき、何ひとつ携えていくことはできません。お金や財産を持っていようがいまいが、家族が多かろうと少なかろうと、死は誰にも同じように起こることです。

・14 節に、「自分の力に頼る者」という表現があります。神さまに与えられた恵みを自分で得た富だと勘違いし、その富を得ることこそが幸せだと感じる人のことでしょう。富を所有することで、自分の存在価値を高めようと思う人もいます。

・ただここで、作者は救いの言葉を伝えます。「神はわたしの魂を贖い 陰府の手から取り上げてくださる」という言葉には、わたしたちが何もかも失ったとしても、神さまは魂を必ず守られるという信頼があるのです。

(4月 26日)「詩編 50 : 1~6」

「わたしの前に集めよ わたしの慈しみに生きる者を いけにえを供えてわたしと契約を結んだ者を。」

(詩編 50 編 5 節)

・「心からの礼拝」：即位式のときに用いられたものとも、契約の更新のときの祭りに用いられたものとも言われています。この詩編は、まるで裁判の様子を描くかのように、語られていきます。

・ペトロの手紙一 4 章 17 節にこのような言葉があります。「今こそ、神の家から裁きが始まる時です。わたしたちがまず裁きを受けるのだとすれば、神の福音に従わない者たちの行く末は、いったい、どんなものになるだろうか」。

・「わたしと契約を結んだ者」を被告として、裁きが始まるのです。そしてその証人は、天と地です。わたしたちの礼拝が神さまからの裁きの時であるとしたら、とても恐ろしい気がします。

(4月 3日)「詩編 39 : 1~7」

ああ、人はただ影のように移ろうもの。ああ、人は空しくあくせくし だれの手に渡るとも知らずに積み上げる。

(詩編 39 編 7 節)

・「過ぎ去る人生」：救いを求める祈りです。重病の試練を受けている人の個人的な嘆願がここには書かれています。表題にある「エドトン」とは、ダビデ宮廷の音楽指揮者の一人だったようです。

・「わたしの口にくつわをはめておこう」、「わたしは口を閉ざして沈黙し」と、言葉を発して祈ることすらできない状況が書かれます。しかしその中においてこそ、本当の祈りを行うことができるのです。

・聖歌 549 番の 1 節に、このような歌詞があります。「祈りは口より いで来ぬとも まことなる霊の 願いことぞ 祈りは心の 底にひそみ 隠るる 炎の 燃え立つなり」。その祈りの姿こそが、信仰なのです。

(4月 4日)「詩編 39 : 8~14」

主よ、わたしの祈りを聞き 助けを求める叫びに耳を傾けてください。わたしの涙に沈黙していないでください。わたしは御もとに身を寄せる者 先祖と同じ宿り人。

(詩編 39 編 13 節)

・「しずけき祈りの」という聖歌 548 番があります。その 2 節の歌詞にはこのようにあります。「しずけき祈りの ときはいと楽し 悩みある世より われをよびいだし 父なるみ神に すべての求めを たずさえいたりて つぶさに告げしむ」。

・この詩編 39 編で作者は、「わたしは黙し、口を開きません。あなたが計らってくださいませ」と宣言します。叫び続ける祈りもあるでしょうが、口を開かない静かな祈りも大切なのです。

・「あなたが計らうだろう」という信頼により、その祈りは楽しいものとなる。そのような信仰が持てたら、どんなに素晴らしいでしょうか。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」というみ言葉が心に浮かんできました。

(4月 5日)「詩編 40 : 1~12」

あなたはいけにえも、穀物の供え物も望まず 焼き尽くす供え物も 罪の代償の供え物も求めず ただ、わたしの耳を開いてくださいました。

(詩編 40 編 7 節)

・「感謝と嘆願」：賛歌と救いを求める祈りです。作者はまず、自分が死の淵から救い出された過去について語ります。「滅びの穴、泥沼からわたしを引き上げ」てくれた主に対して、賛美をささげるのです。

・そしてそのときに主は、いけにえも供え物も求めず、ただ「わたしの耳」を開いてくれたということです。この 7 節の言葉は、ヘブライ人への手紙 10 章 5~7 節の「あなたは、焼き尽くす献げ物や罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした」に通じます。

・神さまは救いの恵みに与かった人に対して、自発的に自分を献げることを求めます。「こういうことが決まっているからこの献げ物をしなさい」ではないのです。「この恵みをわたしは誰と分かち合おうか」という思いが大切なのです。

(4月 6日)「詩編 40 : 13~18」

悪はわたしにからみつき、数えきれません。わたしは自分の罪に捕えられ 何も見えなくなりました。その数は髪の毛よりも多く わたしは心挫けています。

(詩編 40 編 13 節)

・詩編 40 編の前半で作者は神さまに救われたことを報告し、自分は誠実な証人であることを告げました。しかし後半部分では、自分に悪が迫ってきているので何とかして欲しいと願います。

・悪が髪の毛よりも多く、自分にからみついているという状況を想像してみましょう。どんなに心を清く保とうと思っても、欲望や悪い思いが心に浮かんできます。黙想をしても、頭の中の雑念を振り払うのが大変です。

・神さまに信頼することの難しさを、作者は語っているようにも思います。しかしここからこの詩編は、救いを求める祈りへと変化していきます。ただただ主の助けを求めるのです。自分が弱いからこそ、主が必要なのです。

(4月 23日)「詩編 49 : 1~5」

諸国の民よ、これを聞け この世に住む者は皆、耳を傾けよ

(詩編 49 編 2 節)

・「世の富のむなしさ」：知恵文学的な詩編です。2~3 節にあるように、作者はできるだけ多くの人たち（諸国の民、この世に住む者は皆、人の子らはすべて、豊かな人も貧しい人も）に語りかけます。

・聖歌 390 番「栄えに満ちたる 神の都は」は、その Tune name (曲の名前) が AUSTRIA であることから分かるように、オーストリア国家です。アメーzingグレースを作詞したジョン・ニュートンが作詞した曲です。

・その 3 節にこうあります。「神に守らるる 都の民は はかなき楽しみ 虚しき富に 誇れる世びとの 嘲り受くも こよなき喜び 露も変わらじ」。この詩の主題は、「世の富」です。そのむなしさを、作者は伝えていくのです。

(4月 24日)「詩編 49 : 6~13」

人は永遠に生きようか。墓穴を見ずにすむであろうか。

(詩編 49 編 10 節)

・昨日の箇所でも書いたように、この詩編は世の富の空しさについて語ります。しかし富んでいる人に対して非難しているのではなく、貧しい信仰者に対して慰めを与えるものです。富を頼みとしている人は、神さまに身代金を払うことができません。

・そもそも地上の富は、死の前に無力です。どれだけ財産を持っていたとしても、人はそれを持って死ぬことはできないのです。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。(ヨブ 1 : 21)」と書かれている通りです。

・本来であれば、わたしたちは神さまを拝んで生きていくべき者です。しかし富を拝み、心を富に奪われたときに、わたしたちの人生は本当に空しいものになってしまいます。富ではなく、神さまに仕えることができればと思います。

(4月 21日)「詩編 48 : 1~9」

聞いていたことをそのまま、わたしたちは見た 万軍の主の都、わたしたちの神の都で。神はこの都をとこしえに固く立てられる。

(詩編 48 編 9 節)

・「神の山シオン」：シオンの歌に属しています。シオンという地名は、奈良基督教会ではなじみのあるものです。「シオンホール」という会館があり、「シオンの丘」という広報誌があるからです。

・シオンというのは、イスラエルのエルサレム地方の歴史的な地名です。エルサレム神殿の丘がこう呼ばれ、のちにエルサレム全体、さらにイスラエルの地全体への形容詞ともなりました。シオンの丘という場所も実在します。

・シオンの都と丘は大いなる王の首都であり、主の神殿のあるところです。その場所が、全世界の中心に位置しているのです。この詩編ではエルサレムという地上の名ではなく、シオンという聖なる名で神さまを賛美します。

(4月 22日)「詩編 48 : 10~15」

あなたの裁きのゆえに シオンの山は喜び祝い ユダのおとめらは喜び躍る。

(詩編 48 編 12 節)

・「聖地巡礼」に行ったことがある人、うらやましいです。わたしも一度は行ってみたいと思っていますが、実現するのやら。聖地巡礼に行く人は、エルサレム旧市街にある「神殿の丘」にも足をのばすのではないのでしょうか。

・神殿はわたしたちに、何を見せて来たのでしょうか。わたしたちは神殿を通して、神さまの慈しみや正しさに気づかされてきたのかもしれませんが。巡礼で見るべきものは建物ではなく、神さまとはどういうお方なのかということなのです。

・エルサレムという歴史的な場所は、わたしたちが住むところから遠く離れています。しかし、シオンという聖なる場所は、わたしたちのすぐそばにある「新しいエルサレム」なのかもしれません。そのそれぞれの場所で、わたしたちも神さまを賛美しましょう。

(4月 7日)「詩編 41 : 1~10」

わたしの信頼していた仲間 わたしのパンを食べる者が 威張ってわたしを足げにします。

(詩編 41 編 10 節)

・「裏切られた病人の祈り」というタイトルの他に、「弱者を思いやる者達に対する主の是認と救い」と解説している本もありました。みなさんがこの詩編 41 編にタイトルをつけるとしたら、どのようなものになるでしょう。

・10 節に書かれている「信頼していた仲間」とは、ダビデの顧問をしていたアヒトフェルのことではないかと言われています。彼はダビデに近い身分でありながらダビデを裏切り、アブサロムの陰謀に加わっていきました(サムエル記下 15 章)。

・病気や様々なことで苦しんでいるときに、ネガティブな思いが心に溢れることがあります。「裏切られた」というタイトルは、この前半部分の苦しみからつけられたのでしょうか。しかし後半に向けて、神さまへの感謝が祈られていきます。

(4月 8日)「詩編 41 : 11~14」

そしてわたしは知るでしょう わたしはあなたの御旨にかなうのだと 敵がわたしに対して勝ち誇ることはない。

(詩編 41 編 12 節)

・詩編 41 編の前半に出て来た「敵」は、病に苦しむ人に対して傷口に塩を塗るような行為をしていきます。この詩編の作者はその痛みの中にあっても、主の憐れみを求めて祈り続けます。病人に必要なのは憐れみなのです。

・「憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。(マタイ 5 章 7 節)」は、イエス様が山上の説教の中で語られた言葉です。神さまが憐れみ深いように、わたしたちも憐れみを与える者となるように。そのように語られています。

・詩編は全部で 150 編ありますが、実は 3 巻に分かれています。そして第 1 巻は、1 編から 41 編までです。その巻末を見ると、「アーメン、アーメン」という言葉で締めくくられます。わたしたちも「アーメン！」と唱えて第 2 巻へと入りましょう。

(4月 9日)「詩編 42 : 1~5」

涸れた谷に鹿が水を求めるように 神よ、わたしの魂はあなたを求める。

(詩編 42 編 2 節)

・「追放された者の嘆き」: 救いを求める祈りです。本来詩編 42 編と 43 編は、一つの詩であったようです。それは 42 : 6、42 : 12、43 : 5 と同じ言葉が繰り返されていること、また 43 編には表題がないことからわかります。

・詩編 42 編を読むと、「谷川の流れをしたう鹿のように」という讃美歌を思いつく方もおられるでしょう。1984 年に作られたこの歌は聖公会の聖歌集には収められていませんが、とても有名なものです。

・「谷川の流れをしたう鹿のように 主よ我が魂あなたを慕う あなたこそ我が盾 あなたこそ我が力 あなたこそ我が望み 我は主を仰ぐ」。わたしたちが覚える渇きを癒してくれるように、わたしたちは主の恵みを求めていくのです。

(4月 10日)「詩編 42 : 6~12」

わたしの岩、わたしの神に言おう。「なぜ、わたしをお忘れになったのか。なぜ、わたしは敵に虐げられ 嘆きつつ歩くのか。」

(詩編 42 編 10 節)

・大斎節によく歌われる聖歌に、125 番があります。「すべてを尽くして 罪に立ち向かえ われらを支える 力はキリスト」という歌です。昨日の箇所ですら書いたように、わたしたちの魂は神さまなしには生き続けられません。

・この詩編は神殿のないところに追放され神さまから遠ざけられた人びとが、シオンの丘で主を賛美することを望みながら歌ったものだと言われます。「激流」、「深淵」、「波」といった耐えがたい困難の中で、祈った歌です。

・その中で「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ」と自分を励ましつつ、心を神さまに向けるのです。神さまはわたしたちの魂を、ご自分に向かうように造られました。だからわたしたちの魂は、神さまを慕い求めるのではないのでしょうか。

(4月 19日)「詩編 47 : 1~5」

すべての民よ、手を打ち鳴らせ。神に向かって喜び歌い、叫びをあげよ。

(詩編 47 編 2 節)

・「主は世界の王」: 主を王と讃える賛歌です。聖書に出てくるイスラエルの王は、と言われて思い出すのは、ダビデ王かソロモン王ではないでしょうか。ダビデ王は 2 代目、ソロモン王は 3 代目の王でした。そして初代の王はサウル王でした。

・つまりそれまで、イスラエルには王がいなかったのです。多くの部族に分かれていたという理由もありますが、自分たちの本当の王は主なる神さまであるという思いが強かったとも言えるでしょう。

・この詩編は、「主の即位式」としても使われていました。聖公会でもイエス様の昇天日に聖餐式をおこなう場合、この詩編を用いることがあります。教会の上に、王の王としてイエス様をお迎えするということなのです。

(4月 20日)「詩編 47 : 6~10」

諸国の民から自由な人々が集められ アブラハムの神の民となる。地の盾となる人々は神のもの。神は大いにあがめられる。

(詩編 47 編 10 節)

・ユダヤ教では新年の幕開けにトランペットが吹かれますが、その前にこの詩編 47 編を 7 回、神殿で歌ったそうです。6 節に二度「上られる」という言葉があります。神の箱の行列や王の戴冠式を思い起こします。

・しかし 10 節に「諸国の民から自由な人々が集められ」とあるように、この王が支配するのは特定の民族ではありません。ただ「支配」というと、あまり良いイメージを持ってないかもしれません。

・地上の王であればそうでしょう。けれども主なる神さまが王になられたということは、世界が神さまの愛の支配の元にある、恵みに包まれているという意味になります。神の国が、そこに生まれるのです。

(4月 17日)「詩編 46 : 1~8」

神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。

(詩編 46 編 2 節)

・「シオンを守る神」：神さまへの信頼を歌った詩です。表題にある「アラモト調」というのは、「おとめらの声」という意味があります。この詩編 46 編は、マルティン・ルターが書いた「神はわがやぐら（聖歌 453 番）」の元になったものです。

・2~4 節には、たとえ地が姿を変え山々が揺らいで海の中に移ったとしても、神さまはわたしたちの避けどころとして、そこにいて助けてくださるという神さまへの信頼が書かれています。その言葉が、ルターの思いと合致したのです。

・「神はわがやぐら わが強き盾 苦しめるとき 近き助けぞ おのが力 おのが知恵を 頼みとせる 陰府の長(おさ)も など恐るべき」。苦しみの中でも神さまを助け手とする信仰を、わたしたちも持っていたいものです。

(4月 18日)「詩編 46 : 9~12」

地の果てまで、戦いを断ち 弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる。

(詩編 46 編 10 節)

・「世界の希望キリスト（聖歌 425 番）」という聖歌をご存知でしょうか。礼拝であまり歌ったことがないので、初めて聞いたという方もおられるでしょう。「キリスト者の責任」というカテゴリーに含まれています。

・その 2 節は、このような歌詞です。「命の糧は天より 心の飢えを満たす 大地の痛みを癒し 争い 静めたまえ」。詩編 46 編 10 節の「地の果てまで戦いを断ち」という部分から取られたのでしょう。

・人間はいつも、武力によって争ってきました。戦争というのは、自分たちの力で歴史を変えようとする愚かな行為です。しかしその上に、大きな神さまの力があるということを、わたしたちは知る必要があるのです。「力を捨てよ」、その言葉に従いましょう。

(4月 11日)「詩編 43 編」

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。

(詩編 43 編 5 節)

・この詩編 43 編はもともと 42 編と一つだったようです。そのため表題はありません。ですからタイトルも書かないことにします。42 編から続いている祈りのテーマは、「魂の渇き」という内容です。

・イスラエルの人々はバビロンに捕囚され、多くの困難を経験していきます。エルサレムに巡礼することさえ人間の思いだけではできません。神さまの助けがなければ、何もできないのです。

・しかしその中においても、導きとみ守りを求めていくのです。「わたしを伴ってくれるでしょう」との確信を、祈りの言葉にするのです。わたしたちも苦しいときこそ、信頼をもって祈っていきましょう。

(4月 12日)「詩編 44 : 1~9」

神よ、我らはこの耳で聞いています 先祖が我らに語り伝えたことを 先祖の時代、いにしえの日に あなたが成し遂げられた御業を。

(詩編 44 編 2 節)

・「勝利の回想と嘆願」：救いを求める共同体の祈りです。これまでの詩編には個人的な嘆願が多く見られました。この詩はイスラエルの人たちが、共同体として神さまに対して祈っている内容になっています。

・4 節までのところで作者は、神さまがなさってきた救いの歴史を思い返します。ここに見られる考え方は、神さまが王として土地を勝ち取られ、その土地がイスラエルの人々に与えられたというものです。

・この思想が根底にあるから、中東地域に平和が訪れないのかもしれませんが。「これがあなたのお望みでした」と言い切ることによって、それを阻害する人たちは「敵」と見なされ、その敵を排除することが「正義」になってしまいうのです。悲しいことです。

(4月13日)「詩編44:10~17」

御自分の民を、僅かの値で売り渡し その価を高くしようともなさいませんでした。
(詩編44編13節)

・次に作者は、現在の状況について語っていきます。昨日の箇所でも触れましたが、この詩編は「救いを求める共同体の祈り」です。自分たちの国が置かれている状況について、神さまに祈っていきます。

・ユダヤ人は歴史的に、幾度となく迫害されてきました。たとえば旧約聖書続編のマカバイ記を読んでみても、その迫害の様子が詳しく書かれています。この詩に書かれている状況も、散々なものでした。

・「あなたは我らを見放されました」という言葉は、国全体の悲しみをあらわしています。自分たちに向けられている敵意を、あたかも神さまによって与えられた試練だと捉えているようです。この考え方が旧約聖書の根底には流れていることにも心を留めましょう。

(4月14日)「詩編44:18~27」

主よ、奮い立ってください。なぜ、眠っておられるのですか。永久に我らを突き放しておくことなく 目覚めてください。

(詩編44編24節)

・18~23節で作者は、「自分たちには罪はなく、潔白である」と語ります。つまりこの苦境は自分たちの責任ではないと書くのです。それは裏を返せば、「神さま、おかしいでしょ」と言っていることにもなります。

・旧約聖書に、ヨブ記という物語があります。ヨブは無垢な正しい人でしたが、サタンの計略により家族や財産を奪われ、また身体もむしばまれ、悲惨な状況に陥ります。三人の友人がヨブに語りかけますが、ヨブは自分の正しさを確信し続けます。

・神さまよりも自分の方が正しいと主張するヨブの姿を見て、エリフという若者が怒ります。続けて神さまも、「これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経緯を暗くするとは」と怒るのです。自分の正義を盾とする嘆願は、時に危ういものとなるのです。

(4月15日)「詩編45:1~8」

あなたは人の子らのだれよりも美しく あなたの唇は優雅に語る。あなたはとこしえに神の祝福を受ける方。
(詩編45編3節)

・「王の婚礼の祝歌」：メシア的詩編です。昔から権力者の結婚は、大きな意味を持っていました。大河ドラマを見ても、武家時代にはいわゆる「政略結婚」がおこなわれていたことがしばしば描かれます。

・イスラエルにとって王の結婚は、政治的にも宗教的にも大きな意味を持つことでした。ユダヤでも外交の中で他の国から王妃を迎えることは珍しくなく、大きな出来事であったようです。

・新約聖書でイエス様は、婚宴や花婿をたとえの中にしばしば登場させます。(マタイ22:1~14「婚礼の祝宴のたとえ」、マタイ25:1~13「10人のおとめのたとえ」など)。わたしたちもまた、王であるイエス様の婚礼に招かれているということでしょうか。

(4月16日)「詩編45:9~18」

あなたの衣はすべて ミルラ、アロエ、シナモンの香りを放ち 象牙の宮殿に響く弦の調べはあなたを祝う。

(詩編45編9節)

・2011年に、ウィリアム王子とキャサリン妃の結婚式がおこなわれました。テレビなどでその様子を見られた方もおられるでしょう。わたしたちが普段おこなっている式と流れが一緒だったり、知っている聖歌が流れたり、いろいろな発見がありました。

・そのときのキャサリン妃は、とても豪華な服飾品を身に付けていたと記憶しています。この詩編にある「ミルラ、アロエ、シナモン」は東方の高価な香料の名前で、王の衣もとても良い香りを放っていたようです。

・バブル期には、とても豪華な結婚式や披露宴が流行していたそうです。何度もドレスを着替えたり、ゴンドラからスモークの中を登場したり。しかし大切なのは、そこに神さまの祝福があるかどうかだと思います。この詩編には、それが少し足りない気がします。